

正慶孝教授の遺業

——哀惜の念を籠めて

去る二月一日、正慶孝教授は街頭で昏倒され、数刻も経ずして、その夜半、不帰の客となられました。同日も昼過ぎ頃まで出校なされており、余りにも急な逝去でありました。ここに、改めて哀悼の意を表しますとともに、本号掲載の御論考『ドラッカー対ドラッカー』は、著者自身による綿密な校正加筆を経た正慶教授最後の労作となりましたことを御報告致します。

正慶教授は、昭和四十一年早稲田大学大学院経済学研究科を修了された後、『中央公論』編集部次長を務めるなど、長らく出版界で活躍されていたが、同六十二年、産業能率大学に助教として赴任するをもって学問・教育界に転ぜられ、平成四年よりは、明星大学青梅キャンパスの経済学教授として、本年度まで十五年間、その巨人的な豊富の知識をもって、学生たちには言うに及ばず、私共、様々な専門分野の同僚教員にも普く裨益するところ、誠に多大でありました。

しかしながら正慶教授において、雑誌編集者時代と大学教員あるいは学者の時代とを画然と分かつことはできません。既に編集者時代に『近代社会批判序説』など三冊の著作があり、そしてアカデミシャンとなつてからは『楽園回復』の『社会経済学』など九著を世に問うておられる。その一方、時局講演、誌上における時評などの警世の発言は、言論界時代はもとより、その後、終生、活潑にして途絶えることなく、その数は算え切れないのであります。

しかし驚くべきは、その数量ばかりではなく、左に掲げました、本紀

要へのこれまでの寄稿論文題名一覧にも見られる如く、全世界史を背景とすると言ってよい時代と社会への多方面なる関心の広さであり、そしてその一篇でも通読すればその洞察の深さに何人も心を穿たれずにおられないことです。正慶教授は自らを、余り耳慣れぬ「政治経済学者」の名をもって任じておられたが、「政治的生きもの・人間」の学としての経済学という、エコノミックス即ち経世済民の本統の道を歩まれた。

論究『ドラッカー対ドラッカー』をもって、自ら歩まれたその道の最後の確証とせねばならないことを、私共は深く悲しむ他ありません。しかしまた、正慶教授の偉いなる遺業が私たちの手許にある。原著者既に在さぬの寂しさは拭えぬも、教授の著作にその思索の跡を辿って、歴史と文化への広き眺望が与えられ続けることを、喜びとしなければならぬ。

平成二十年二月二十五日

(青梅校一般教育委員長・山下善明記)

合掌

本紀要掲載・正慶孝教授論文一覧

- 「エコノミー、エコロジ、そしてエシックス」(第七号)
- 「ポスト資本主義社会の文化的矛盾」(第九号)
- 「『企業家精神』の時代」(第十号)
- 「現代的教養とは何か」(第十一号)
- 「情報社会の論理と心理」(第十二号)
- 「第一人称単数の社会へ向けて」(第十三号)
- 「近代市民社会の奴隷的性格について」(第十四号)
- 「『偽りの力』を与えてしまった現代技術」(第十五号)
- 「ドラッカー対ドラッカー」(第十六号)